

編集後記：いわゆる生成 AI（人工知能）が一般にも使われるようになって1年あまり、ブームという言葉では収まりきらないような勢いで世間に広まりました。今後、より一層の浸透が進むと思いますが、社会全体に影響を及ぼす革新的な技術だと見る向きもあれば、安全性に関する懸念や、試してみたが大したものではないという声もあり、その動向から目が離せません。なにやら、1990年代のインターネット黎明期を思い起こさせます。

学会機関紙の編集の視点からは、投稿される原稿の作成に生成 AI がどの程度活用されるようになるのかに興味があります。その活用度を見抜くことは、そもそも可能なのか。既に、検索や文章チェックには AI 技術が使われていますから、あえて生成 AI の活用度

を見抜く必要は無いともいえます。結局のところ、利用については著者が全ての責任を担うことになるのだと思います。

一方、生成 AI に論文の査読ができるかを検証する試みも始まっているようです。AI を用いて不適切な引用を調べる手法等は既に使われているので、その延長として、査読時に生成 AI の利用が進むのは容易に想像できます。先ずは、人間による査読のプリプロセスとしての利用なのでしょうが、将来は、生成 AI が作成した論文を、生成 AI が査読するような話が現実になるかもしれません。

なお、この編集後記の作成に生成 AI は使用していません（というのは本当かな？）。

（城岡竜一）